関西大学心理臨床センター紀要，15，13～22，2024

研究論文

キンダーカウンセラーの実践活動と必要とされる技能に関する文献研究

関西大学人間健康学部　香川　香
元関西大学学生相談・支援センター心理相談室　河村　仁美
元関西大学学生相談・支援センター心理相談室　瀬古　文

要約

保護者や保育者等を対象とした多様な子育て支援が実践されており、そのなかの一つに幼稚園における心理支援の取り組みがある。本研究の目的は、幼稚園におけるカウンセラーの実践内容と、期待される役割、効果的な実践を行うために必要な技能について文献による検討を行うことである。CiNii Research において、「（幼稚園 AND カウンセラー）OR キンダーカウンセラー OR キンダーカウンセリング　OR 保育カウンセラー OR 保育カウンセリング」の検索語を用いて 2011 年から 2023 年に公表された論文を検索した。最終的に本研究目的に合致した 14 件を分析対象文献とし、著者 3 名で検討を行った。「保育者支援」についてはコンサルテーションや情報共有、保育者自身の心理的支援の重要性が示され、「保護者支援」では、実際に役立つ助言の必要性や保護者同士の関係づくりなど間接的支援の有用性も示された。「園児支援」では、観察によるアセスメントの活用や遊びそのものの意義が示され、「他機関との連携」では、長期的な視点をもち地域の専門機関と連携を図ることの重要性が示された。「KC に期待される役割」については上記に加えて、保育者・保護者・園児を繋ぐ役割や地域の子育て支援に果たす役割などが示唆され、「必要とされる技能」については幼児の生物的、心理的、社会的側面からの幅広い知識、社会資源に関する知識、高度なコミュニケーション技能、共感的態度などがあげられた。

キーワード：子育て支援、キンダーカウンセリング、保育カウンセリング、文献研究

1　問題と目的

こども家庭庁（2023）の「今後 5 年程度を見据えたこども施策の基本的な方針と重要事項等～こども大綱の策定に向けて～（答申）」では、「子育て当事者が、経済的な不安や孤立感を抱いたり、仕事との両立に悩んだりすることなく、また、過度な使命感や負担を抱くことなく、健康で、自己肯定感とゆとりを持って、こどもに向き合えるようにすること」が重要であるとし、子育てや教育に関する経済的負担の軽減や、地域子育て支援の推進など、困難な子育て環境にある当事者への多様な支援の必要性を示している。国の施策に伴い、臨床心理学の専門性を活かした子育て支援への期待は大きく（鬼塚, 2017）、保護者や保育者等を対象とした心理支援の取り組みが実践されている。そのなかの一つに幼稚園における心理支援の取り組みがある。幼稚園における心理支援は、2003 年に大阪府私立幼稚園連盟が「キンダーカウンセラー事業」を全国に先駆けて開始した。2005 年に文部科学省が「幼児教育の充実のための具体的方策として、教員と保護者を支援する保育カウンセラーを導入し、活用しやすくなるような方策を検討

する必要がある」と答申を出し、同年に幼稚園や家庭等を支援する体制の整備を目指し、東京や千葉、愛知等の全国7都市で「幼児教育支援センター事業」として保育カウンセラー等の専門家からなる幼児教育サポートチームが設置された。2009年には京都府私立幼稚園連盟が「キンダーカウンセラー派遣事業」を開始し、兵庫県でも「私立幼稚園等子育て支援カウンセラー事業」が行われている。また、文部科学省（2021）は学校教育法施行規則の一部を改正し、「スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーに関する規定を幼稚園に準用させること」を示し、幼稚園における心理臨床の専門家の配置が推進されている。幼稚園における相談活動には、自治体や教育委員会等による巡回相談も実施されているが、頻度が少なく単発の相談になりがちである。一方、キンダーカウンセリング事業や保育カウンセリング事業では、カウンセラーが定期的に幼稚園を訪問するため連続的で、外部専門家ではなく園内にいて支援に取り組むことができる（大西・國久，2018）という特徴がある。幼稚園におけるカウンセラーの役割には、保護者支援、保育者支援、子ども支援があげられ（安家・邨橋・菅野ら，2004）、保護者からの子育ての悩みや発達上の不安に関する相談、保育者からの子どもへの関わり方や発達上の問題に関する相談などの期待が特に高いと指摘されている（竹中，2008）。また、幼稚園におけるカウンセリングは、1回の面接で解決を望んでいることが多く通常のカウンセリングよりも助言の比率が高くなる（竹中，2007）ことや、非指示的な対応のみに終始すると不信感を抱いて中断となる危険性がある（菅野，2004a）との指摘もあり、幼稚園におけるカウンセラーの役割や、カウンセリングの方法には独自性があると推察される。

そこで本研究の目的は、幼稚園におけるカウンセラー（キンダーカウンセラー・保育カウンセラー）の実践内容と、期待される役割、効果的な実践を行うために必要な技能について、本邦で2011年以降に公表された文献による検討を行い、幼稚園における心理支援の特徴を理解し、さらなる発展の一助とすることである。

2　方法

（1）対象文献の選定方法

2023年7月8日にCiNii Researchを用いて文献検索を行った。検索対象は2011年から2023年に公表された論文で、検索語は「（幼稚園 AND カウンセラー）OR キンダーカウンセラー OR キンダーカウンセリング　OR 保育カウンセラー OR 保育カウンセリング」とした。重複を除外して43件の論文を特定した。タイトルと抄録から一次スクリーニングを実施し、総説11件、書評1件、文献研究1件、幼稚園以外の研究5件、カウンセラー以外の支援に関する研究2件の合計20件を除外した。23件の論文が二次スクリーニングの対象となり、著者3名で全文を確認し、幼稚園以外の研究8件、カウンセラー以外の支援に関する研究1件の合計9件を除外し、14件を分析対象文献とした。文献選定のフローチャート（図1）はPreferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-Analyses（PRISMA）（Moher・Liberati・Tezlaff et al., 2009）に基づいて作成した。

（2）対象文献のデータ分析方法

本研究では、幼稚園におけるカウンセラー（以下、KCと表記する）の実践活動について、各論文から得られた結果を「保育者支援」「保護者支援」「園児支援」「他機関との連携」「KCに期待される役割と必要とされる技能」の5項目に分類して分析した。

3　結果と考察

（1）研究の特徴

対象文献14件の著者名、発行年、研究目的、研究対象、研究方法、主な結果を表1に示す（以

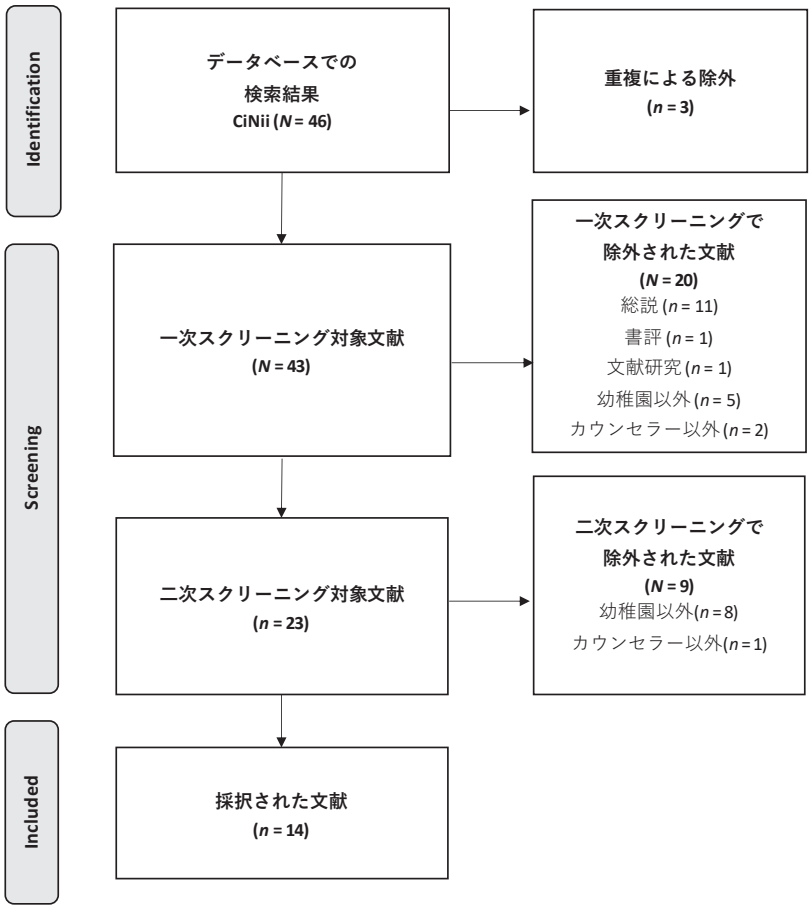

図１　文献選定のフローチャート

下、14 文献についてはＡ～Ｎで表記する）。定量的研究は２件（14.3%）、定性的研究は 12 件（85.7%）で、うち６件は事例研究であった。研究内容を分類したところ、保育者支援に関する知見が示されていた研究は 10 件[A, B, D, E, G, H, J, K, L, N]、保護者支援は８件[B, C, H, I, J, L, M, N]、園児支援は７件[B, C, E, F, H, J, L]、他機関との連携は４件[C, E, H, I]、KC に期待される役割と必要とされる技能については７件[B, C, E, F, J, L, N]であった。

全 14 件のうち定量的研究は２件に留まり、定性的研究が中心であった。キンダーカウンセリングは実践の歴史が浅く、十分な事例数や量的データの収集が困難なことから、定量的研究が少なく定性的研究が多い可能性がある。KC の役割や効果を明確化するためには、定量的研究も含めて多様なデータの収集と検証が必要と考えられ、今後の課題といえよう。研究内容としては、保育者支援の方法や有効性に関するものが多く、保育者支援が KC の中心的な活動となっていると推察される。他機関との連携に関する報告は少なかったが、幼稚園単独や KC のみでの対応には限界があるため、園児や保護者へのより適切な支援のために、今後は他機関との連携のあり方について研究することが期待される。

（2）保育者支援

保育者への支援については、関与観察に基づいたコンサルテーションや助言、情報共有の重要性が示されていた[B, D, E, G, H, J, K, L]。

表１　分析対象文献

	著者	発行年	目的	研究対象	研究方法	主な結果
A	原口	2022	継続的なコンサルテーションによる保育者の変化を考察する。	保育者1名	定性的研究（事例研究） 1事例を提示し保育者としての想いに着目したコンサルテーションのあり方を検討した。	KCは子どもの発達を共有できる存在であるからこそ、コンサルが深まる。保育者の葛藤の背景にある想いをアセスメントし、その想いが保育実践に落とし込めるようにすることが重要と示唆された。保育者としての想いを扱った結果、問題に関する捉え方の変化に留まらず、保育者としてのあり方全体に影響を及ぼす根本的な変化が生じたと考えられる。
B	牧・岸本・植村ら	2022	KCが幼稚園に「居る」ことの意義を検討する。	KC3名と特別支援員3名	定性的研究 子どもとのかかわりでの印象的なエピソードの記述を分析した。	エピソードから抽出された105個の概念をKJ法で4つのカテゴリー（子どもたちの姿、KCの想い、心理臨床実践の基本技術、心理臨床実践の基本姿勢）に分類した。さらに「KCの主観的体験の構造」を示し、心理臨床実践の基本と、子どもとKCの相互作用の重要性を指摘した。
C	下温湯	2020	未就園児の母親に子の発達や感情を伝えるKCの面接の意義を検討する。	母児同室面接3事例	定性的研究（事例研究） 母児同室の面接記録から、子の行動と発達の把握、母親への支援について検討した。	「母親」「子ども」「KCの役割」の観点で面接の意義を検討した。母親には安心感の醸成と、子の理解や実行可能な対処法の発見が有用であること、子どもには遊び体験そのものが発達を促すこと、KCの見立ての限界を心得て発達等の専門機関へつなぐ選択の必要性を示した。
D	日光	2019	気になる子どもの保育に対する教師の効力感とKC事業の効果を検討する。	KC事業を実施している幼稚園（46園）に勤務する教師126名	定量的研究 KC事業の実施状況と効果、期待、保育効力感等について実施したアンケート調査を分析した。	保育観察、カンファレンス、アセスメントなど教師や在園児にとって直接的な支援がよく実施され、地域の子育て家庭へのカウンセリング、子育てに関する講演など間接的な支援は少なかった。効力感については、間接的支援経験がある者、保育経験年数の長い教師の方が有意に高かった。
E	大西・國久	2018	幼稚園での発達障害児への対応におけるKCの役割を検討する。	KC1名（筆者）と教職員14名	定量的研究 幼稚園1園の平成25から28年度の利用件数等のデータと、KC事業への教職員の満足度を分析した。	利用件数は年々増加しており、発達に関する相談が最も多く、他園より教員との情報交換や園児の直接観察が多く、教職員の満足度は高かった。KCの役割は①定期的に園内で子どもの様子を把握し現状に至る背景を説明する、②今後のリスクや成長の可能性を教員と保護者が共有できるよう橋渡しする、③今ここでできる対応の工夫を提供する、ことがあげられた。
F	森岡	2018	園児の心の育ちに関わるキンダーカウンセリングのあり方を検討する。	園児1名	定性的研究（事例研究） 園児と直接関わったエピソードを提示し、キンダーカウンセリングで活かされる支援を検討した。	キンダーカウンセリングは幼稚園が心を育む良い器になるように関わる養育的な心理臨床である。聴き手を得て語ることで、子どもが自分自身を受け入れ、主体的な存在になる道が開かれる。子どもの思いをわかろうとして声を聴くことそのものにキンダーカウンセリングの心理臨床の専門性が活かされる。
G	原口	2017	保育カウンセリングにおける保育者支援のあり方を検討する。	保育者1名	定性的研究（事例研究） 保育者との1年間のコンサルテーション過程から、保育者支援のプロセスと方法を考察した。	保育者支援において、その第一段階として保育者の悩みや不安を「共に抱える」ことで保育者を支え、第二段階では園児の直接観察に基づく見立てを保育者の理解と合わせて共に検討した後、第三段階である「見守る」支援に移る、といった三段階のプロセスが提示された。
H	藤枝・森田・新井	2015	特別支援園内研修の経験から、今後の課題を検討する。	KC1名（筆者）	定性的研究 特別支援園内研修での経験を７つの観点に区分し、今後の支援の課題について検討した。	限られた回数で実施される特別支援園内研修での経験から、保育者・子ども・保護者との関係づくりの際に心がけた点や急な変更に対する対応策、子育て支援への取り組みについて提示された。また、他機関との連携や就学支援、卒園後の情報交換の必要性が示された。
I	藤田	2013	園児の母親に対するグループカウンセリングの意義を検討する。	幼稚園のグループカウンセリングに参加した30-40代の母親延べ18名	定性的研究（事例研究） 4種類のテーマで実施したグループカウンセリングの実践を分析した。	グループカウンセリングでは「自己開示による心理的体験」「認知の変化」「心理的知識や手法の習得」が促進される。信頼できる空間で困りごとを他の母親と共有することは、安定した育児環境の形成や本来持っている自己成長力や潜在的可能性の促進に寄与すると考えられる。ファシリテータは母親を守りつつ「自己」「他者」「社会的集団」という多角的視点からの思考を促進することが重要である。
J	山下	2011	KCの実践と役割について検討する。	KC1名（筆者）と園児1名	定性的研究（事例研究） 私立幼稚園での6年間のKCの実践を提示し、事例を通してKCの役割を考察した。	親の葛藤に寄り添い、子どもと直接関わりながらアセスメントすること、保育者と協働しながら実行と検証を繰り返し保育者が報われるような支援を行うことが重要である。また、園内外のつなぎ的存在としての役割を担うことが求められている。
K	菅野	2011	KC派遣事業の経過報告と、園へのアンケート結果	KC1名（筆者）および、京都府私立幼稚園連盟、京都府臨床心理士会	定性的研究 キンダーカウンセリング活動とその評価について園へのアンケートを実施し分析した。	アンケートでは「KCの専門的な見方や対応で園児への理解が深まった」「保育者が安心して園児に関われるようになり、園全体で子どもを理解しようという姿勢ができた」「保護者との面接で親子関係が改善した」「専門機関との連携がスムーズになった」「もっと具体的な助言が欲しい」「新入園児の見立てを早い段階で教えてほしい」「回数を増やしてほしい」という意見が出た。
L	坂上	2011	KCの役割について検討する。	KC1名（筆者）	定性的研究 KCの活動を提示し、KCの役割を考察した。	KCの実際の活動からその役割として、①保育時間中の観察、②個別相談、③保護者を対象にした活動、④保育カンファレンス、⑤地域の子育て支援の５つがあげられた。
M	杤原	2011	個別相談事例から、今後のKC活動の知見を得る。	KC１名（筆者）	定性的研究 個別相談を内容と回数から３つに分類し、それぞれを分析した。	106名の個別相談を内容と回数で集計し、①面接が1回で終了したグループ、②面接が数回で終了したグループ、③継続面接を必要としたグループの3つに分類された。個別相談においてはこれらの層の違いを念頭に置き、母親のニーズを感じ取りながら、それに応じたかかわりが求められている。
N	渡邊	2011	保育者とKCの協働について検討する。	KC1名と保育者	定性的研究 KCによる保護者・保育者支援を提示し、保育カウンセラー事業の意義を検討した。	保育カウンセラー事業は、①個別相談を通した子育て不安の軽減や親同士の関係づくりを図る保護者の子育て支援の実現と、②保育者の意識改革による保育改善の2点に分けられる。それぞれの専門性を生かして連携・協働することが子育て環境や保育環境の改善に重要である。

園児たちの日常場面への関与観察を行い[B]、KC の専門的な視点から園児を見立て、その見立てを保育者と共有することによって、保育者は園児への理解を深めることができ、園全体で共通理解を持って園児に関わることが可能になる[K, L]と考えられる。また、保育における意識改革や保育改善、問題の早期発見と早期対応[D, G]にも繋がると思われる。このような有用なコンサルテーションを可能にするために、KC は日常的に園児たちの関与観察や職員との情報交換を行い[D]、職員間でのカンファレンスへ参加する[D]、保育や子育てに関する講演会を実施する[D]等、保育者のパートナー的役割[E]を担う積極的な活動が望まれる。発達障害のある園児や、診断はついていないものの保育の指導上困難を抱える「気になる子」への対応は、保育者にとって困難を生じやすい（郷間・圓尾・宮地ら, 2008）。そのため保育者は KC に対して子どもの見立てや保育の方向性に関する助言を期待しているようである[H]。このような園児や保護者への対応の難しさは保育者にとって時に無力感や不全感を生じさせるだろう。保育者のバーンアウトを防ぎ、園児たちが幼稚園という生活の場で自分らしく生き生きと活動できるよう、KC は心理学的視点から具体的かつ実践可能な提言ができるような臨床力が求められる。ただ、実際のところコンサルテーションは、即座に役立つ支援や助言の提供が難しい場合もあるため、実践と検証を繰り返しながら保育者が報われるような支援[J]を行うことが重要である。

また、コンサルテーションや情報共有だけに留まらず、保育者自身への心理的な支援も重要であると示されていた[A, E, G, N]。

保育者の葛藤の背景にある保育者としての想いや信念に耳を傾けることで、目の前の問題のみならず、保育者としてのあり方といった根本的な部分にも影響を与える可能性[A]が示唆された。加えて、上述のように発達障害のある園児や未診断の「気になる子」への対応は困難が生じやすい。特にクラスにおける「気になる子」の数の多さは、未診断であるがゆえに加配がつかず人手不足に陥りやすく、保護者や専門機関との連携が難しい、対応方法が未確立である等の要因によって保育者のバーンアウトに影響を与えると考えられている（木曽, 2013）。KC はこのような保育者の抱える困難や悩みに対してコンサルテーション等を行うとともに、不安や辛さを共に抱える[G]ことで保育者の孤立を防ぎ、安心感を与えるような関わりも重要であると思われる。KC に自身の気持ちや保育への想いを認められることによって保育者は安心感と自信を取り戻し、前向きに日々の業務に向かうことができるようになる[N]と考えられ、保育者を支えることは、間接的に園児たちや保護者の支援にも繋がる可能性[E]が示唆された。一般的に KC は幼稚園の保育者等よりも活動時間や頻度が少なく、毎日の幼稚園生活で継続して園児たちに関わることは難しい。そのため KC は、日常的に園児たちと関わる保育者をエンパワメントし、保育者が安心して自身の能力を発揮して日々の保育を提供できるような支援が有用であるといえよう。保育者が安心して業務に専念できるようになると、間接的に園児や保護者、他の職員、ひいては園全体への支援に繋がると考えられ、KC はこのような好循環を生み出す潤滑油のような役割も担っているといえるだろう。

以上のように、KC によるコンサルテーションや保育者への支援は、保育者のみならず園児や保護者、園全体へも影響を与える可能性が示唆される。このような支援を可能にするために KC は園児や保護者のアセスメントのみならず、クラスや職員間の集団力動や園全体の雰囲気等へのアセスメントを行うことも重要と考えられる。また、日頃から保育者と積極的にコミュニケーションをとって連携し信頼関係を構築しながら、何か困ったことがあれば相談できる存在として KC の存在を認識してもらえるよう心掛ける必要があると思われる。加えて、木曽（2013）によると、保育者自身が発達障害について知っている、対応できると思えるように知

識や技術を身につけることもバーンアウト予防に有用とされている。そのため KC は、発達障害についての情報提供や研修会を開催し、園全体で発達障害や「気になる子」への理解を深める機会を設ける必要もあると思われる。また、ストレスマネジメントやアンガーマネジメント等、保育者のセルフケアを目的とした配布物の作成や研修会の開催等のより予防的な支援も有用と考えられる。

（3）保護者支援

保護者への支援については、日常場面のなかで保護者が専門家に気軽に相談することができることの重要性が示されていた[B, H, L, M, N]。

通い慣れた幼稚園での相談は、保護者にとって利便性が高く[L]、他の相談機関と比べると敷居が低い[M]ため、気軽に利用しやすい[B]と考えられる。送迎時に挨拶を交わしたり[H]、園庭に出て保護者と話したりする[N]など、KC が日常場面に存在することによって、保護者が相談しやすい環境がつくられ[N]、必要な支援を提供することができるといえる。また、保護者向けの講演会や懇談会などの開催も KC の周知には有効である[L]。

次に、個別相談については、その占める割合が非常に大きく[M]、個別相談を通して保護者が安心感を得て[C, N]、子どもを理解し[C]、育児における主体性[C, I]をもつことの重要性が示されていた。

子育てに不安や困り感を抱いている保護者が安心感をもつためには[N]、カウンセリングの基本である傾聴・受容・共感の姿勢が面接を支える基盤[C]となるが、KC の個別相談は 1 回で終了する場合が大半であるため、実際に役立つ助言を必要とすることが多い[M]。その際、一般的な対処法を伝えるのではなく、保護者とともに具体的かつ実行可能な対処法を考え[C, J]、保護者自身が主体性をもって育児に取り組める[C, I]ように支援することが保護者支援において大切になる。また、子どもを理解することで保護者は安心感をもつことができ[N]、前向きな育児に繋がっていく[C]。

さらに、KC の役割として、保護者同士の関係性づくりの一助となり得る可能性についても示唆された[I, N]。

保護者は子育てに関する困りごとや心配事をほかの保護者と共有し、多角的視点を得ることで、本来持つ力を取り戻すことができたり[I]、子育ての喜びを他者と共有することで心のゆとりをもつことができたりする[N]。その点において、保護者同士の関係づくりの場を提供することも KC の重要な役割の一つと考えられる。

子育てに関する悩みを抱えながらも、なかなか相談することのできない保護者は少なくないだろう。外部の専門機関と異なり、日常場面に関わることができる KC は保護者にとって身近な存在となり得るため、KC の働きかけは重要なものとなる。スクールカウンセラーが学校の中で保護者と接触する機会を持ち、スクールカウンセラーの人となりを伝えていくことで、親和的イメージが向上して利用を促すことができたり（藤後・大橋・岩﨑，2016）、広報活動などを通してスクールカウンセラーの雰囲気が分かることで相談に対する心配が低下したりする（山崎・飯田，2016）ように、KC も園庭での何気ない会話や講演会などを通した日常的かつ積極的な関わりを保護者との間に持つことでその人となりを知らせることができ、KC に対する親和性や信頼感が高まることによって、身近な存在としてより多くの保護者に必要な支援が行き渡ると考えられる。また、個別相談を通して保護者が安心感を得て、子育てに対する具体的な方法を考え実行しようとすることは、保護者自身の自己肯定感や主体性の向上に寄与する。親の主体性が育まれることで親子関係が肯定的に動くことに繋がる（松永，2014）との指摘もあり、個別相談によって保護者が子どもに対する理解を深め、主体的に子育てに向き合えることは、安定した親子関係の構築に繋がる可能性がある。さらに、同時期に子育てをしている人

との繋がりをつくることは、社会力が育つ親支援としても有効である（虫明・西山・髙橋, 2015）。保護者に対する個別的で直接的な支援だけでなく、保護者同士の関係づくりなどの間接的支援をも行うことで、保護者はより安心した環境で主体的に子育てに取り組むことができると考えられる。

（4）園児支援

園児への支援については、園内でのプレイセラピーや療育などの直接的な支援に関する報告はあまり見られず、園児を観察したり関わったりすることでアセスメントし、保育者支援や保護者支援へ活用するといった間接的な支援について報告されていた[B, E, H, J, L]。

KC は、園児が日常的に過ごしている幼稚園での生活を送迎時の様子も含めて、直接、定期的に観察したり、関わりをもったりしながらアセスメントすることができる[E, J, L]ため、より的確なアセスメントにつながり[J]、有用な支援方法の立案に活用することができると考えられる。一方で、心理検査や発達検査を用いずに、正確な発達水準等をアセスメントすることは難しい。KC は、園児の行動観察や、保護者および保育者からの聴き取りによって専門的支援の必要性の有無を判断し、専門的支援の必要な園児には、早期に専門機関へ繋げられるよう配慮することが必要と考えられる。

また、園児とともに遊ぶことによって子どもの警戒心を下げることができ、園児に対する心理臨床的関わりへ円滑に移行することが可能となる[H]ことや、遊びそのものが発達を促進する[C]など、KC が園児と遊ぶことそのものが、園児の心理的成長に有効であると示唆された。日常的に、園児とやり取りする機会をもつことで、直接やり取りはしていない園児たちにも KC の存在が伝わり、困り感を抱いたときに子どもから KC へ関わりを求めることに繋がる[B]といった予防的な効果も期待される。幼稚園という場は、心理相談室のプレイルームや面接室とは異なり、情報や要因が非常に多いため、プレイセラピーと全く同じ関わりは不可能ではあるが[B]、心理臨床実践の基本姿勢や基本技術を意識して関わることが重要[B]との指摘があり、園児に対する直接的な支援方法について幼稚園における KC の支援の独自性をさらに検討する必要性が示唆された。

スクールカウンセリングと比較すると、キンダーカウンセリングで園児を直接対象とする活動は現状では多くはない（菅野, 2004b）が、心理臨床の専門性を活かして子どもの声を聴き、表現を見守り、受けとめるといった姿勢を KC は求められている[F]ことに留意する必要がある。幼稚園等で適切な支援を受けた発達障害児は就学後も全体的な困難度が低いまま維持されているとの報告（平澤・坂本・池谷ら, 2012）もあり、今後もより有効な園児支援のあり方を検討していくことが必要であろう。

（5）他機関との連携

他機関との連携については、公的な相談機関[I]、発達等の専門機関[C]、医療機関[E]、園児が利用している療育機関[E, H]、小学校[H]、などとの連携の重要性が示されていた。

園児の行動観察や、保護者および保育者からの聴き取りのみでは、正確に発達をアセスメントすることは難しいことを KC は十分に認識し、必要に応じて発達等の専門機関へ繋いだり[C]、園児が利用している療育機関等と連携[H]したりする必要がある。また、KC は月に 1 回程度の勤務であることも多いため、実際にフォローできる件数には限界があることや、より長期的な支援も視野に入れて、適切な専門機関を紹介する[E]ことは KC の行う支援のなかでも重要なものと考えられる。また就学時には、小学校での支援が円滑に進むよう幼小連携の役割を担ったり[H]、公的な相談機関や気軽に利用可能な電話相談などの社会資源を紹介したりする[I]ことも、子どもと保護者への継続的で切れ目ない支援に繋がる可能性がある。

KC の勤務頻度は一般的に多くはなく、KC が直接的に行える支援には限界がある。また、幼稚園という場で発達検査等を用いたアセスメントを行うことは難しい場合が多い。そのため、他機関への紹介や連携が必要になると考えられる。専門機関での的確なアセスメントは、支援方針の立案に活用され、園児の成長に役立てられるだろう。また、アセスメント結果を KC も共有することができれば、保育者へのコンサルテーションを通じて、保育上の配慮や工夫等に活用することも可能となる。

KC は、直接的支援だけでは様々な点において限界があることをふまえ、地域の専門機関等と連携することによって、園児や保護者をきめ細かくサポートする役割を担うことが重要である。他機関との有機的な連携を行うためには、KC は幼稚園周辺にある多様な機関に関する情報を収集し、連携できる体制を予め構築しておくことが望ましいと考えられる。

（6）KC に期待される役割と必要とされる技能

KC に期待される役割としては、保育者支援におけるコンサルテーション[E, F, N]、保護者支援における相談活動[C, E]、園児支援におけるアセスメント[B, F]、他機関との連携や保育者・保護者・園児の橋渡し活動[E, J]等が示され、その役割を担うために必要とされる技能とともに以下に考察する。

保育者へのコンサルテーションは重要な活動であり、KC は、発達のアセスメント能力と子どもの心身の成長や社会資源とのつなぎ[F]など、幼児に関する生物的、心理的、社会的側面からの幅広い知識が必要とされる。また、子どもの様子を直接把握したうえで、専門的な立場から現状に至る背景を保育者に分かりやすく説明し[E]、今ここでできる対応の工夫やアイデアを保育者へ提供したり[E]、園内（園長、担任、KC など）での役割分担と連携の調整[N]を担うことなど、説明力や調整力といった高度なコミュニケーション技能が必要とされる。

次に保護者への面接等の支援活動においては、KC は「何ができる人なのか」という点を明確化して周知し[E]、保護者が KC の専門性を認識することで、より効果的な支援に繋がる[E]と考えられる。また、KC との面接は単回で終了することが多いが、そのときに KC と良好な交流を経験し、また KC の専門性を実感した場合は、以降に、援助を求める行動に繋がりやすい[C]と指摘されている。保護者にとって子育ては幼稚園で終わるわけではなく、長期的に継続していくことから、幼稚園での心理臨床家との出会いが、その後の援助要請行動にも影響する可能性をふまえておくべきであろう。単回の出会いにおいても、「役に立った」「話をしてみてよかった」と保護者が感じることができるような的確な助言や共感的態度の重要性が示唆される。

園児支援にあたってのアセスメントについては、個々の子どもの状態を見立てるだけではなく、子ども同士の関わりの発達段階[B]をも見立てる視点をもつことで、幼稚園場面における関わり方の工夫や対策を検討しやすくなる可能性がある。保育者や園児と同じ場所に存在し、直接観察し、リアルな場面を保育者と共有できることでタイムリーな支援[B]や、保育者や園児に寄り添った支援に還元することができる[B]。そのようなアセスメントには、上述の通り、子どもの心身の成長や社会資源等に関する幅広い知識[F]なくしては実現することができないといえよう。

園児の抱えている問題への対応にあたって、保育者、保護者がそれぞれ向き合えずにお互いに不満を感じて関係がうまく構築できない場合などは、保育者、保護者が園児をめぐるチームとして機能するように、「つなぎ的存在」[J]としての役割も期待される。また、幼稚園卒園以降についての長期的視点をもって、専門機関へ橋渡しすること[E]も、園児の切れ目ない支援のためには重要である。KC は、幼稚園の中にいて保護者や教職員とともに子どもの成長を見守り、支援する[E]ことが活動の中心ではあるが、さら

に、地域の子育て支援[L]に果たす役割をも期待されている。KC は、園内だけでなく地域も視野に入れた子育て支援活動に尽力することを求められていることに留意し、地域にある各種専門機関やそれぞれの地域の特徴について、十分に理解しておく必要がある。

令和２年度少子化社会に関する国際意識調査報告書によると、「自国はこどもを生み育てやすい国だと思うか」との質問に対して、「そう思わない」と回答した者の割合が、日本は 61.1％にのぼり、フランス 17.6％、ドイツ 22.8％、スウェーデン 2.1％を大きく上回っていた（内閣府，2021a）。さらに「子育てによる精神的疲れが大きい」と回答した者の割合についても、日本が 43.1％で最も高く（内閣府，2021b）、2015 年の同調査結果と比較して 14.6 ポイント上昇していた。日本における子育て支援は喫緊の課題であり、より有効な心理支援のあり方を見出すために、KC は実践活動を通して研究を積み重ねることが重要と考えられる。

文　献

（A ～ N はレビュー対象となった文献を示す）

安家周一・邨橋雅広・菅野信夫・辻河優（2004）大阪府私立幼稚園連盟におけるキンダーカウンセリング事業の利用効果，日本保育学会大会発表論文集，57，676-677.

[H]藤枝静暁・森田満理子・新井邦二郎（2015）公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録（4）：3 年間の活動の振り返り，埼玉学園大学心理臨床研究，1，14-20.

[I]藤田恵津子（2013）幼稚園児の母親を対象とするグループカウンセリングの取り組み，鳥取環境大学紀要，11，99-108.

郷間英世・圓尾奈津美・宮地知美・池田友美・郷間安美子（2008）幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究，京都教育大学紀要，113，81-90.

[G]原口喜充（2017）保育カウンセリングにおける保育者支援の方法とプロセスに関する一考察，心理臨床学研究，35（5），503-513.

[A]原口喜充（2022）キンダーカウンセリングにおいて保育者としての想いに着目する意義，心理臨床学研究，40（4），289-299.

平澤紀子・坂本裕・池谷尚剛・日比暁（2012）発達障害のある幼児の就学後の適応に関する追跡調査：幼稚園等の支援教室への通級児を対象として，岐阜大学教育学部研究報告・人文科学，61（1），129-134.

菅野信夫（2004a）幼稚園における子育て支援──キンダーカウンセラーの活動──，臨床心理学，4（5），600-605.

菅野信夫（2004b）キンダー（保育）カウンセリングの現状と展望，天理大学カウンセリングルーム紀要，1，47-54.

[K]菅野信夫（2011）京都府私立幼稚園連盟キンダーカウンセラー派遣事業，子育て支援と心理臨床，4，59-63.

木曽陽子（2013）発達障害の傾向がある子どもと保育士のバーンアウトの関係── 質問紙調査より──，保育学研究，51（2），199-210.

こども家庭庁（2023）「今後５年程度を見据えたこども施策の基本的な方針と重要事項等～こども大綱の策定に向けて～（答申）」 https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/5b7aefcc-c384-4dc1-abc9-8b69b5a904eb/e53add23/20231201_councils_shingikai_04.pdf（2023 年 12 月 20 日現在）

[B]牧剛史・岸本岳・植村珠世・難波宏晃・山本涼加・大岡康平・森本万実（2022）心理臨床家が幼稚園に居ることの意義：幼稚園カウンセラーの主観的体験に関する質的研究，佛教大学臨床心理学研究紀要，27，47-58.

松永愛子（2014）親子の「主体性」を育む「地域子育て支援センター」におけるスタッフの援助実践，目白大学総合科学研究，10，9-22.

Moher, D., Liberati, A., Tezlaff, J., & Douglas, G. A., and the PRISMA Group.（2009）. Pre-

ferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-Analyses: The PRISMA Statement. *Annals of Internal Medicine*, 151 (4), 264-269.

文部科学省（2005）「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）第 2 章幼児教育の充実のための具体的方策」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1420141.htm（2023 年 12 月 10 日現在）

文部科学省（2021）「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の施行について（通知）」 https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/mext_00034.html（2023 年 12 月 14 日現在）

[F]森岡理恵子（2018）キンダーカウンセリングで発達的視点が活きる：子どもの語りを聴くことについて，臨床心理学，18（2），198-202.

虫明淑子・西山修・髙橋敏之（2015）幼稚園教育における人的つながりを支える親支援の方向性，岡山大学教師教育開発センター紀要，5，83-92.

内閣府（2021a）「令和 2 年度少子化社会に関する国際意識調査報告書　Ⅵ　社会的支援について」 https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf/zentai/s2_6.pdf（2023 年 12 月 14 日現在）

内閣府（2021b）「令和 2 年度少子化社会に関する国際意識調査報告書　Ⅳ育児について」 https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf/zentai/s2_4.pdf（2023 年 12 月 14 日現在）

[D]日光恵利（2019）キンダーカウンセラー事業による継続的な支援についての効果の実感：気になる子どもに対する保育効力感に着目して，兵庫教育大学幼年児童教育研究，30，29-36.

鬼塚詩織（2017）乳幼児期子育て支援の現状と課題：臨床心理学的地域援助の実践に向けて，九州大学心理学研究，18，37-43.

[E]大西貴子・國久美代子（2018）幼児期の発達障害支援におけるキンダーカウンセラーの役割，次世代教員養成センター研究紀要，4，45-52.

[L]坂上頼子（2011）日野市保育カウンセラーの活動の実際，子育て支援と心理臨床，4，54-58.

[C]下温湯まゆみ（2020）キンダーカウンセリングにおける子育て支援：ごっこ遊びを取り入れた 2 歳児と母親の発達相談，大阪樟蔭女子大学研究紀要，10，103-112.

竹中美香（2007）幼稚園におけるキンダーカウンセラーの役割についての一考察，東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要，4，87-90.

竹中美香（2008）幼稚園におけるキンダーカウンセラーの役割に関する研究，東大阪大学・東大阪短期大学部教育研究紀要，6，9-17.

[M]朽原京子（2011）キンダーカウンセリングにおける保護者面接についての一考察：母親の個別相談の実態から支援の在り方を考える，近畿大学臨床心理センター紀要，4，45-57.

藤後悦子・大橋恵・岩﨑智史（2016）子育て中の母親のスクールカウンセラーへの援助要請，東京未来大学研究紀要，9，137-147.

[N]渡邊明子（2011）保育臨床 日野市の保育カウンセラーと保育者との協働，子育て支援と心理臨床，3，96-99.

山崎沙織，飯田順子（2016）中学生の保護者が教師・スクールカウンセラー・外部の専門機関に援助を求めることへの心配尺度の作成とその特徴，教育相談研究，53，13-24.

[J]山下直樹（2011）私立幼稚園における保育カウンセリング，子育て支援と心理臨床，4，64-68.